

初任校の玉川第一小学校、そして2校目の中学校において、毎日学級通信を出す先輩教師の姿を見てきた私は、いよいよ自分でも学級通信を毎日出すこととなった。ようやく、毎日出すことができるチャンスが巡ってきたのである。

3校目の中学校では、学級担任をしていなかったので学級通信を出すことすらできなかった。4校目のイタリア、ローマ日本人学校は、そもそも学級通信を出してはいけない学校であった。ではどうしていたか。3校目の中学校では、生徒指導主事として「生徒指導だより『薫風』」を出していた。また、部活動の顧問としては、「部活動通信『かがやき』」を出していた。ローマ日本人学校では、中学部の担任をしていた。異国の地で生活する生徒たちに何ができるかと考え、「交換ノート」を続けることにした。

日本に戻り、中学校で学級担任をすることになった。最初は以前と同じように年間100号をめやすに学級通信『薫風』をスタートさせた。同じ学年の教員に、職員室の席は私の目の前で、採用2年目の23歳の男性教員がいた。この男が、意欲的に学級通信を出していくのである。正直「このペースでは負ける」と思った。「勝つには日刊しかない」とまでは考えなかったが、若手教員に触発され、結果的に毎日出すようになったのである。

果たして、「毎日出せるのか。書くことがなくなるのではないか」という不安とともに始めたのだが、それは杞憂にすぎなかった。書きたいことはどんどん出てきて、ストックしておき、いつ出すかというタイミングの問題となった。物事には、ポイントとタイミングがある。タイミングを間違えると、思ったほどの効果が得られないことがある。結局、日の目を見ずにお蔵入りとなったネタもたくさんあるくらいであった。

私の学級通信には、行事予定や連絡事項はない。いわゆる説教じみた生徒指導的な内容もない。また、よくないことは載せないようにしていた。製本して形として残るため、後で読んだときのことを考えていたのである。生徒が書いたものや生徒の中学校生活の足跡となるものは載せるようにしていた。

日刊での学級通信も軌道に乗り、タイトルである『薫風』の季節となった5月に、ふと思った。「毎日出しているわりには手応えがない。なぜだ。中身の問題か」あのときはわからなかったが、その後、原因が判明することになった。

こちらは、熱心に毎日毎日出していても、読み手である生徒と保護者にとっては、消化しきれないのである。それは、自分が保護者となり、息子や娘の中学校からの配布物の多さに辟易するようになり、身に染みた。保護者宛の〇〇だより、〇〇通信が多いのである。保護者としてすべてに目を通すのは、なかなか大変なことである。いったい新聞のように毎日届く学級通信を読んでもくれる保護者はどのくらいいるのであろうか。

(次号に続く)